

図4 環境改修プロセスと活動内容 (S施設)

次にそれぞれの環境改修項目の内容と目的を説明する。

小スペース化：3～5名程度の小グループで静かに過ごせるようになるために、既存の間仕切壁（耐震壁）を利用した小スペースを設置した（N施設）。

個室化（準個室化）：2～4名部屋から1名の個室（準個室）に変更し、夜間だけでなく日中もひとりで安心して過ごせる場所の確保を目的としている（N施設）。

スタッフルームの開放：ダイルムとスタッフルームの間仕切壁を取り除き、スタッフルームを共用空間へ変更することで、スタッフと高齢者が共用空間において長い時間一緒に過ごせることを目的としている（S施設）。

ダイルム入口：ダイルムと廊下の間仕切りとして格子の引き戸を設置し、他フロアの高齢者との関わりの促進を目的としている（N施設）。

窓：室内に光を入れ、外を眺められることを

目的としている（N施設）。

キッチン：高齢者が自発的またはスタッフと一緒に簡単な調理が行なえるように、旧スタッフルームのキッチンを開放した（S施設）。高齢者の残存能力を活かして簡単な調理や作業が行なえるように、2箇所からアプローチできる対面型キッチンをダイルム内に設置した（N施設）。

カウンタ：スタッフルーム近くにキッチンと連続した半円形カウンタを設置し、スタッフが簡単にダイルムを見渡せ、また高齢者と会話や作業ができるようになることを目的としている（N施設）。

トイレ：ダイルムに近接してトイレを設置し、スタッフがトイレ誘導しやすく、また高齢者がトイレへ自発的に行きやすくなることを目的としている（N施設）。

照明：バイオリズムを整え規則正しい生活を促進するために、時間帯で光を調節できるブライトケアを導入した（N施設）。

表3 環境改修項目の内容と目的

	S施設		N施設	
	改修内容	目的	改修内容	目的
環境改修項目 設備機器 空間構成 家具	小スペース化		既存の壁を利用し小スペースの設置	3~5人程度の小さなグループで静かに過ごせるようになること
	個室化(準個室化)		多人数(2~4人)部屋から準個室に変更	日中もひとりで安心して過ごせる場所の確保
	スタッフルーム開放	間仕切壁を取り除き共用空間として変更	スタッフと高齢者が共用空間において長い時間一緒に過ごせること	
	デイルーム入口		格子のドアを設置	デイルームの外(廊下)とのつながりを確保し他フロアの高齢者との関わりの促進
	窓		南の壁に窓を設置	光を入れ、外を眺められること
	キッチン	旧スタッフルームの既存キッチンを開放	高齢者が自発的に又はスタッフと簡単な調理が行なえるようになること	デイルーム内に対面式キッチンを設置 高齢者の残存能力を活かして簡単な調理・作業が行なえるようになること
	カウンタ		スタッフルーム近くにキッチンと連続した半円カウンタを設置	スタッフが簡単にデイルームを見渡せ、高齢者と会話や作業ができるようになること
	トイレ		デイルームに近接したトイレを設置	スタッフが簡単に誘導できることと、高齢者が自発的に行きやすくなること
	照明		ブライトケアを導入	バイオリズムを整え規則正しい生活の促進
	テーブル	キッチン近くにダイニングテーブルを配置	高齢者が自発的またはスタッフと飲食や調理、作業が気軽にできるようになること	異なる形状のテーブルを配置 特徴のある場所を配置することによる高齢者の特定の居場所をつくること、選択性の増加
	ソファ	畳の上にソファを配置	家庭と同じようなしつらえによる選択性の増加	L字型やテレビに向かいソファを配置 特徴ある場所の配置による選択性の増加
	畳	6畳と3畳の畳スペースを配置	家庭と同じようなしつらえと、床座を継続することによる高齢者の活動性の維持または促進	
	間仕切り家具	6畳の畳スペースの周囲を収納家具で間仕切り	畳スペースを落ち着いた静かな場所にする	
飾りつけ(絵画等)			壁に絵画や時計を設置 視覚的な刺激による見当識支援	

■：改修項目なし

テーブル：キッチンの近くにダイニングテーブルを設置し、高齢者が自発的またはスタッフと飲食や簡単な調理・作業ができるようになることを目的としている（S施設）。異なる形状のテーブルを配置し、特徴のある場所によって高齢者に特定の居場所をつくることと、居場所の選択性の増加を目的としている（N施設）。

ソファ：一般的な家庭でも行われているように畳の上にソファを配置し、居場所の選択性を増加させることを目的としている（S施設）。小スペースにソファをL字型やテレビに向かって配置し、選択性の増加を目的としている（N施設）。

畳：デイルームに6畳、旧スタッフルームに3畳（高さ30センチ）の畳を配置し、家庭と同じようなしつらえと、床座での日常生活を継続することによる高齢者の活動の維持または促進を目的としている（S施設）。

間仕切り家具：6畳の畳スペースの周囲に間仕切り用の収納家具を配置し、落ち着いた静かな場所にするを目的としている（S施設）。

飾りつけ：壁に絵画や時計を配置し、視覚的な刺激による見当識の支援を目的としている（N施設）。

4. 環境改修前（中）・後の場所配置

2施設の環境改修前（中）・後の場所配置を図5に示す^{註1)}。S施設は、改修前にはデイルームを中心にして廊下、スタッフルーム、そしてトイレにより共用空間が構成されていた。共用空間の場所配置をみると、デイルームにはテーブル1~4や、テレビソファ、ソファセット1・2が配置されていた。廊下にはトイレ付近に2人ソファ1・2、廊下の奥に3人椅子1・2などが配置されていた。改修後は居室とトイレには変化がないが、スタッフルーム

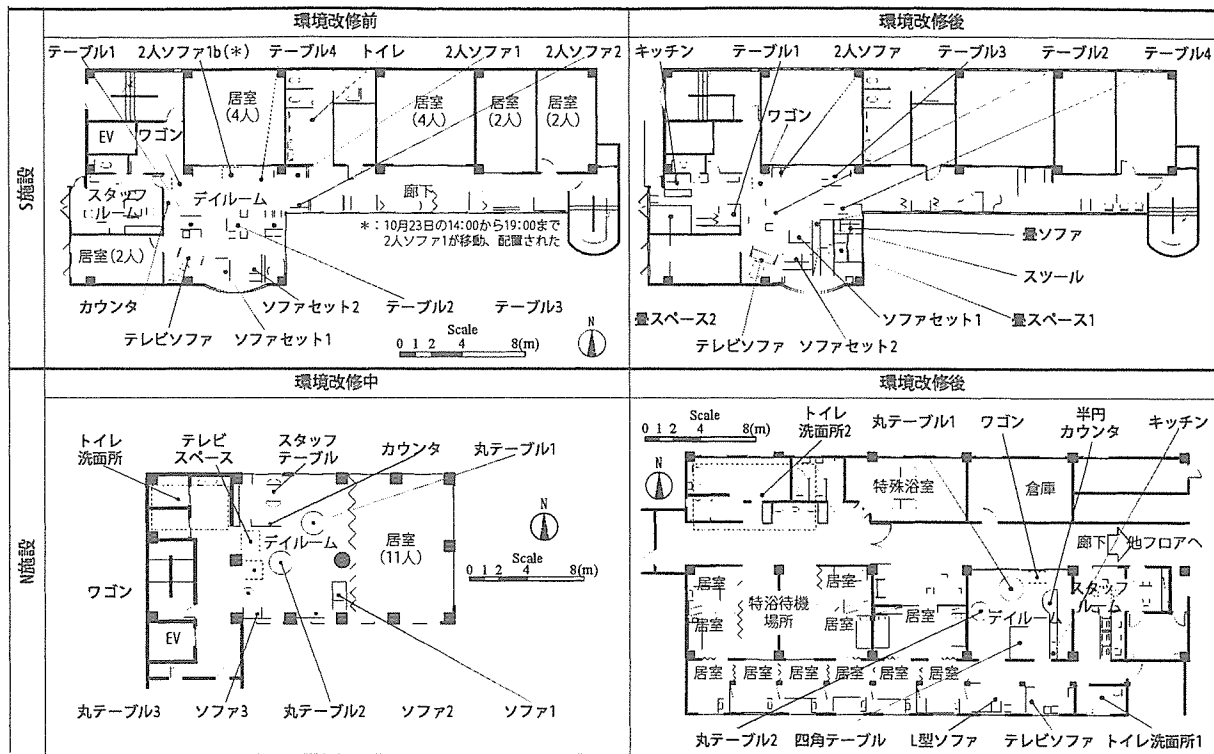


図5 環境改修前(中)・後の場所配置

とダイルールの間の壁が壊されたため共用空間が広がった。場所配置をみると、ダイルールの間に収納家具で囲まれた6畳の畳スペース1と畳ソファが配置され、それに伴い靴の脱ぎ履き用のスツールが設けられた。また、旧スタッフルームのキッチンが開放され、その付近に30cm高の畳スペース2やダイニングテーブルとしてテーブル1・2が配置された。

N施設の改修中フロアでは中央でダイルールの居室に分けられており、居室空間は11人部屋となっていた。ダイルールの場所配置をみると、壁、窓に沿ってソファ1・2・3が、中央には丸テーブル1・2・3が配置されていた。また北側にはカウンタを隔てて、スタッフテーブルが置かれていた。改修後フロアはダイルールの12の準個室を中心に構成され、ダイルールの北側には他のフロアへ続く廊下があった。ダイルールの南側には間仕切壁によりできた小スペースに2組のソファセットが配置され、一方はL字型に、もう一方はテレビと一緒に置かれた。ダイルールの北側には丸テーブル1・2、四角テーブルなどの異なった形状のテーブル

が配置された。トイレはダイルールの隣に隣接して配置されたトイレ洗面所1と、廊下を挟んだ位置にあるトイレ洗面所2の2箇所となった。また、その他にダイルールの内に対面型キッチンとそれに連続した半円形カウンタが配置されたことや、ダイルールの入口には格子の引き戸が取り付けられ、高齢者はフロアを自由に出入りできるようになったことが特徴として挙げられる。

5. 調査概要

表4に調査概要を示す。S施設では改修前後に2日ずつ、N施設では改修中・後に1日ずつ調査を行なった。調査時間はS施設が7時から19時まで合計12時間、N施設が他のフロアでの高齢者全員によるリハビリ(14時～16時)の2時間を除いた合計10時間で、主にビデオ録画による行動観察調査を行なった。今回の調査では改修項目の多さから特に共用空間を対象とした。調査内容は①高齢者の選択場所・滞留時間・移動の連続的な記録と行動内容の5分ごとの記録(集計の際は回数×5

表 4 調査概要

	S施設		N施設	
	改修前	改修後	改修中	改修後
調査日	03年10月14, 23日	04年2月10, 12日	04年2月17日※	04年7月21日※
調査方法	ビデオ録面による行動観察調査・ヒアリング調査(補足的)			
調査時間	7時-19時(合計12時間)		7時-14時, 16-19時(合計10時間)	
行動観察調査内容	①高齢者の選択場所・滞留時間・移動を連続的に記録、行動内容を5分間隔で記録 ②スタッフの選択場所・滞留時間・行動内容・行動の対象となる高齢者を連続的に記録			
対象高齢者数	12名(男2, 女10)	13名(男2, 女10)	11名(男0, 女11)	12名(男0, 女12)
対象スタッフ数	5名(各調査日) 合計20名		4名(各調査日) 合計8名	
調査日選定理由	改修前(中)・後とできる限り1日のプログラムや働いているスタッフが同じになるよう条件に配慮し選定			
環境適応状況	改修中と改修後の調査は、高齢者が環境適応したとスタッフが判断した後に実施			
調査者の立会い	調査者はフロアの隅からビデオ録面では把握できない箇所を記録			

※N施設では調査日選定の際、制約が多く1日のみの調査となった。

をして時間単位に変更)と、②スタッフの選択場所・滞留時間・行動内容・行動の対象となった高齢者を連続的に記録とした^{註2)}。対象高齢者はフロアで居住している全高齢者とし、S施設では改修前が2名、改修後が13名で、N施設では改修前が11名、改修後が12名であった。また対象スタッフは調査日に働いているボランティアを除くスタッフとし、S施設では各調査日5名、合計20名で、N施設では各調査日4名、合計8名とした。また高齢者の属性や特有の行動についてより詳細に把握するため、スタッフに対するヒアリング調査も同時に行ない、補足的に活用した。なお、ビデオは高齢者の活動範囲から離れたところに設置し、高齢者の普段の生活をできる限り把握できるよう考慮した。調査員はビデオでは把握できない死角などの様子を記録するために、フロアの隅から観察、記録した。調査日の選定には改修前(中)・後の比較ができるよ

うに、働いているスタッフや1日のプログラムができる限り同じになるように条件に配慮し、改修中(N施設)と改修後(S施設、N施設)の調査は、高齢者が環境適応したとスタッフが判断した後に実施した。

6. 高齢者属性

調査時の高齢者の属性を表5に示す。なお改修前(中)・後ともに調査の対象となった高齢者は同じアルファベットで表示している。S施設では介護度をみると、改修前は介護度4の高齢者が5名と最も多く、改修後は介護度3の高齢者が9名と最も多かった。平均介護度は改修前・後とも3.5であった。障害度^{註3)}をみると、改修後のほうが身体的な障害の軽い高齢者が多くみられた。認知症度^{註4)}では、改修後のほうが軽度の高齢者が若干多くみられた。移動に常時車いすが必要な高齢者は改修前が6名、改修後が3名であった。

N施設では改修中は介護度5が7名と最も多く、平均介護度は4.2であった。改修後は介護度5が8名と最も多く平均介護度は4.2であった。障害度をみると、改修後のほうが身体的な障害の軽い高齢者が多くみられた。認知症度では改修後のほうが重度の高齢者が多くみられた。移動の際、常時車いすが必要な高齢者は改修中が4名で、改修後が6名であった。なお高齢者Hはショートステイ利用者で、介護度等のデータは不明である。

7. 1日のプログラムとスタッフ配置

調査日の1日のプログラムとスタッフ配置

表 5 高齢者の属性

	S施設													N施設																						
	高齢者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	高齢者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M					
改修前	介護度	4	5	4	2	3	5	4	4	2	2	3	4					介護度	4	5	5	5	5	5	5	不明	3	5	4							
	障害度	C2	C2	B2	A2	A2	C2	B2	B2	A2	A2	B1	A1					障害度	B1	A2	B2	A2	B2	A1	B1	不明	B2	B1	B2							
	認知症度	IV	M	Ⅲb	Ⅲa	IV	IV	Ⅲa	Ⅲb	IV	Ⅲb	IV	M					痴呆度	Ⅲb	IV	Ⅲb	M	M	IV	IV	不明	IV	IV	Ⅲb							
	車いす*1	●	●	●	○	●	●	●	●	○								車いす*1		●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●					
改修後	介護度				3	3	5	4	3	3	3	3	4	5	3	3	3					5	5	5	5	5	不明	3	5	4	3	5				
	障害度				不在	A2	A2	C2	B2	B2	A2	B1	A2	A1	B2	A2	B1	A2					出	A2	B2	A2	B2	A1	B1	不明	B2	B1	B2	A2	A2	
	認知症度				不在	Ⅲa	IV	IV	Ⅲa	Ⅲb	IV	Ⅲb	Ⅲb	M	IV	Ⅲa	IV	Ⅲb					出	IV	Ⅲb	M	M	IV	IV	不明	IV	IV	Ⅲb	IV	IV	
	車いす*1				○	○	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
入所日(年.月)	97.7	00.11	98.10	00.6	95.12	03.10	99.11	97.2	98.3	03.9	02.4	02.8	96.2	04.1	03.12	03.10																				
入所日(年.月)	97.3	00.4	98.7	00.10	01.5	00.1	99.1	SS ^{*2}	98.6	97.1	03.4	04.5	04.5																							

*1: 移動の際の車いすの必要性の度合いを示し、●は常時必要、○は一時的に必要。 *2: SSはショートステイを示す。

表6 プログラムとスタッフ配置およびシフト

S施設											N施設																					
時刻	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	時刻	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19					
プログラム	朝食		申送り		音楽療法		昼食		レク		おやつ		夕食		朝食		申送り		排泄誘導		昼食		排泄誘導		リハビリ		排泄誘導		事務作業		夕食	
スタッフ配置(人数)	2		3		2				3										2				3				2					
スタッフシフト	改修前	夜勤明け1名, 早朝勤務1名														夜勤明け1名																
	改修後	日勤3名														日勤早出1名, 夜勤1名, 日勤遅出1名																

およびスタッフシフトを表6に示す。プログラムをみると、S施設において改修前の1日のみボール遊びのレクリエーション（以下レクと略す）が行なわれていたこと以外は2施設とも改修前（中）・後でプログラムに変更はみられなかった。N施設では高齢者の排泄誘導と、スタッフがパソコンへの入力を行なう事務作業の時間がプログラムにより決められているのが特徴的であった。なお本研究では高齢者が参加するプログラムが行なわれていない時間を自由時間とした。

スタッフ配置とスタッフシフトをみると、S施設において改修前・後でスタッフシフトが変

更されているものの、スタッフ配置では2施設とも改修前（中）・後で変更はなく、S施設の方が3名のスタッフが配置されている時間が長かった。

C. S施設における高齢者の行動分析

1. 選択場所と滞留時間の変化

図6に高齢者ごとに選択した場所と滞留時間および共用空間・居室・フロア外での滞留割合を示す。滞留割合をみると、改修前・後とも全ての高齢者に共通して共用空間で過ごす割合が最も高かった。しかし、居室の滞留割合が30%を超える高齢者も数名みられた。この

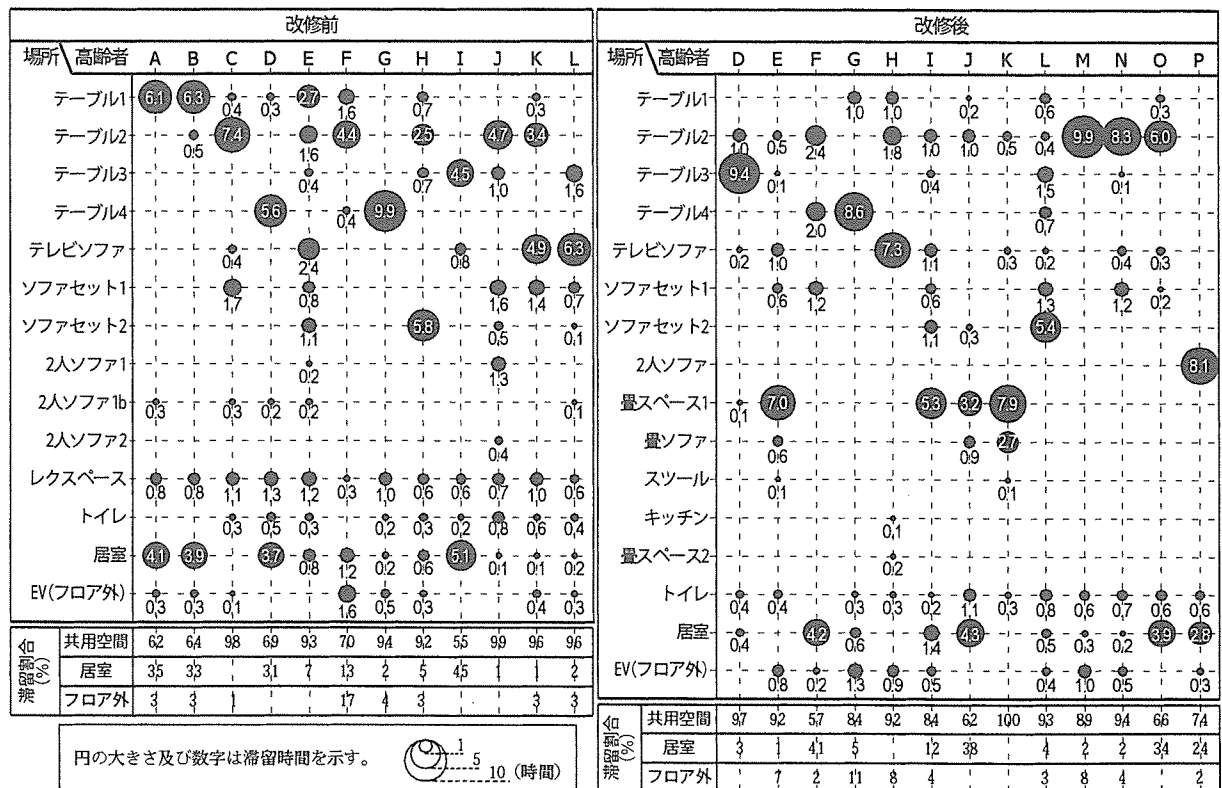


図6 高齢者ごとの選択場所と滞留時間 (S施設)

主な要因としては、体調が悪化したために自分の居室で静養していたことがあげられる。

高齢者ごとにみると、改修前では多くの高齢者が4つのテーブルのいずれかに最も長時間滞留していた。改修後では、テーブルで長時間滞留する高齢者は減少し、一方で、畳スペース1で長時間滞留する高齢者が4名みられた（高齢者E・I・J・K）。また改修後に新しく入所した高齢者M・N・O・Pはデイルーム全体を眺められるテーブル2や2人ソファで非常に長い時間滞留していたことや、選択した場所数が他の高齢者に比べ少なかったことから、施設環境に戸惑っていたと推察される。

次に場所ごとにみると、改修後に新しくできた場所（キッチンや畳スペース2）は選択されることはあったが、滞留時間は非常に短かった。その理由として、畳スペース2は、ここにスタッフの荷物が置かれていたことや、改修後もこれらの場所をスタッフ専用の場所であると認識している高齢者がいたことが挙げられる。また改修前・後とも廊下に配置された場所はほとんど選択されていなかった。

2. 高齢者ごとの行動変化

本研究では行動の変化を「会話行動」、「無為状態」、「自発的移動」、「徘徊行動」の4つに着目し分析した^{註5)}。

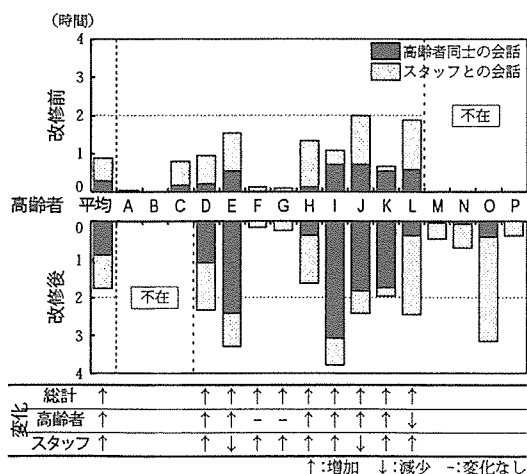


図7 会話行動時間の変化 (S施設)

(1) 会話行動の変化

本研究では会話行動を他の高齢者やスタッフと相互に関係をもち話している状態とし、認知症高齢者であるため意思疎通が成立しているかは考慮しなかった。

図7に高齢者ごとの会話行動時間の変化を示す。全ての高齢者に増加がみられ、高齢者平均でも改修後は改修前の約2倍となり、特に高齢者同士の会話の増加が目立った。またスタッフとの平均会話行動時間も増加しており、スタッフルームがなくなってスタッフと高齢者が共用空間で一緒に過ごす機会が増えたことによる影響が考えられる。

改修後に増加した高齢者の中でも、特に畳スペース1で長時間滞留するようになった高齢者E・I・J・Kの高齢者同士の会話行動が大幅に増加した。畳スペース1ではこの4名のグループが形成されることで会話行動が促されていた。グループが形成された要因として高齢者同士の相性などに加えて、収納家具で囲まれていたことや、卓袱台や畳のような他人との距離を調整しやすいしつらえであったことなどの物理的要因も考えられる。

また高齢者Lの会話行動時間は改修後に増加したが、その割合をみると高齢者同士が減り、スタッフとの会話が増加しており特徴的であった。改修後に認知症が深刻になり、落ち着きのない高齢者Lの横にスタッフが座り会話することが多くなったためである。

(2) 無為状態の変化

本研究における無為状態とは主に正面を向

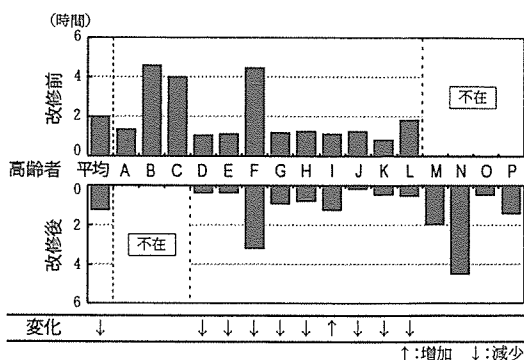


図8 無為状態時間の変化 (S施設)

き何もしていない状態とし、睡眠行動や長時間テレビを見る行動は無為状態に含まなかった。

図8に改修前・後における高齢者ごとの無為状態時間の変化を示す。ひとりを除いて全員減少しており、高齢者平均をみると改修前に比べ約半分に減少した。特に大幅な減少が5名の高齢者(高齢者D・E・J・K・L)にみられた。

大幅に減少した高齢者のうち、高齢者E・J・Kは改修後に畳スペース1で長時間滞留した高齢者であった。グループで過ごす畳スペース1ではひとりの高齢者が話し掛けたり、おしぼりで顔を拭くなどをすると、近くの高齢者が反応したり、まねをしたりする場面が多くみられた。グループ内の他の高齢者との関わりが促進することで無為状態が減少したと思われる。その他に無為状態が減少した特徴的な高齢者として高齢者Hを挙げる。改修前は食事を待つ時間帯に無為状態が多く観察されたが、改修後には昼食と夕食前にテーブル1でご飯をよそう作業をしており、そのことが無為状態の減少につながったと考えられる。特に女性の高齢者にとって、入所前に家庭で行っていた日常的な生活行動を支援するような環境改修は無為状態を少なくする上で有効であると思われる。

(3) 自発的移動の変化

本研究では高齢者の自発的な行動には場所間の移動も影響を与えているとの視点^{文13)}から、自発的移動についての分析を行った。ここでは、場所間の移動のうち、一部でも自力で行なうことを自発的移動とした。例えば、高齢者が自ら立ち上がり、目的の場所に向かう途中でスタッフに介助される場合や、スタッフの介助により場所を立つが途中から自力で移動する場合も自発的移動とした。逆に、終始スタッフに誘導された移動を介助移動とした。

図9に改修前・後における高齢者ごとの総移動数の変化を自発的移動と介助移動に分けて示す。自発的移動数をみると、1名の高齢者Lが大幅に減少し、2名の高齢者D・Eが比較的大きく増加した以外は、大きな変化はみられず、高齢者平均においても大きな変化はみられなかった。またこのような傾向は総移動数や介助移動数でも同様にみられた。

大幅に減少した高齢者Lは認知症が深刻になり行動を抑制する薬が処方されていたためと考えられる。一方、増加した高齢者Dは改修前に居室での滞留割合の高かったことや、操作方法のわからない車いすで過ごしていたことが要因として考えられる。高齢者Eは改修後に畳スペース1から近くにあるスツールや畳ソファまで這って移動することが増加したためである。またその他に、改修前に自発的移動数の多い高齢者F・I・Jは改修後も多い特徴がみられた。高齢者I・Jは障害度が軽度であり、高齢者Fは自力で車いすを操作していたことから、自発的移動の多さには身体的な能力や車いすを扱えることなどの個人的な能力に大きく影響されると思われる。

(4) 徘徊行動の変化

本研究では徘徊時間を、施設内を自らさまよい動き回る行動とした^{文14) 文15)}。具体的な集計方法としては、図10に示すように場所選択1回あたりの平均滞留時間を基準として、そ

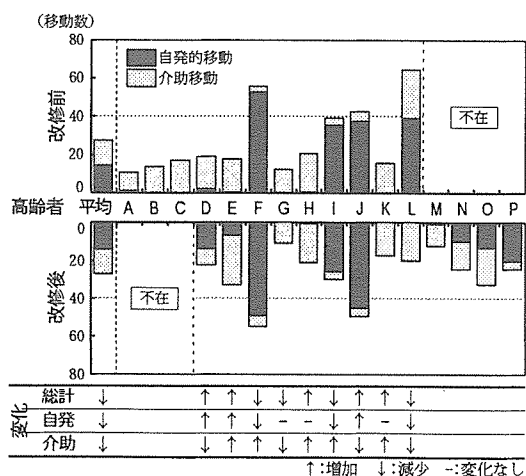
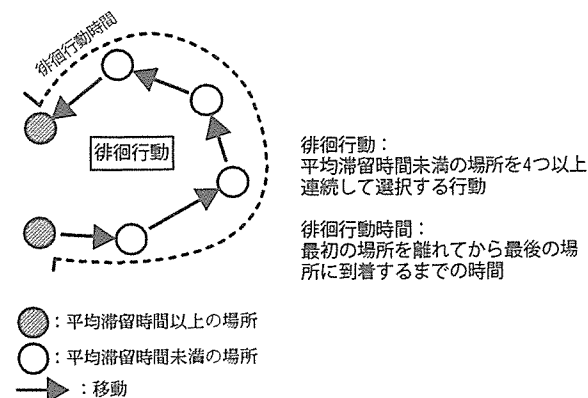


図9 自発的移動数の変化 (S施設)



平均滞留時間 = 合計滞留時間 ÷ 合計場所選択回数

図 10 徘徊行動の集計方法

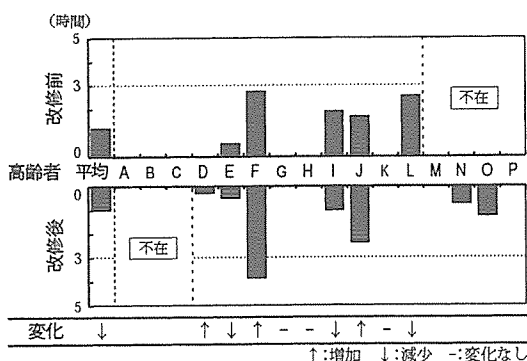


図 11 徘徊行動時間の変化 (S 施設)

れ以下の場所を4つ以上連続して選択する行動を徘徊行動とした。また最初の場所を離れてから最後の場所に到着するまでの時間を徘徊行動時間とした。集計は徘徊行動における個人差(16)を考慮して、高齢者個人個人で行った。なお4つ以上選択する行動を徘徊行動としたのは、トイレなどの目的となる場所があり、その前後に1つずつ場所を寄道する(4つの場所を連続して選択する)ケースを考慮したためである。

図 11 に改修前・後における高齢者ごとの徘徊行動時間の変化を示す。高齢者平均は減少したが、減少した高齢者が3名(E・I・L)、増加した高齢者が3名(D・F・J)となっており、個人差が大きかった。

大きく減少した高齢者Iは、畳スペース1を選択する際に靴を脱ぐこと、床座であること、一緒にいるグループの形成などにより長時間滞留し、そのことが徘徊行動の減少につながったと考えられる。一方、比較的大きく

増加した高齢者Fは改修前・後とも車いすを操作して、テーブルから廊下の奥まで行って戻るのが繰り返す徘徊行動が多くみられ、また高齢者Jは改修後に居室とトイレの間を往来する徘徊行動が多くみられた。両者とも徘徊行動の主な動線は廊下となっているが、廊下にあるソファなどは長時間立ち寄る場所とはなっておらず、場所の選択性を高める上で、今後、工夫する必要があると思われる。

D. N 施設における高齢者の行動分析

1. 選択場所と滞留時間

図 12 に高齢者ごとに選択場所と滞留時間および滞留割合を示す。滞留割合をみると、改修中では1日中全てにおいて共用空間で過ごしていた。改修後も多くの高齢者が共用空間で過ごしていたが、居室やフロア外の滞留割合が高い高齢者もみられた。なお、高齢者Bのフロア外の滞留割合が76%と非常に高いのは、17:00までフロア外にある静養室にいたためである。

高齢者ごとにみると、改修中はテーブルを中心に滞留していた高齢者が多く、11名中9名がいずれかのテーブルにおいて最も長い時間を過ごしており、そのうち3名は共用空間においてテーブル以外にはトイレ洗面所しか選択していなかった。改修後は全ての高齢者がテーブルとソファの両方を選択し、ソファにも比較的長い時間滞留していた。

場所ごとにみるとテレビのある場所に変化がみられた。改修中はテレビスペースに車いす利用者2名が選択するだけであったのに対し、改修後にはテレビソファを6名の高齢者が選択しており、小スペースにあり、囲まれた静かな場所であったことが影響したと思われる。新たにダイルームに近接して設置されたトイレ洗面所1では身体的な障害度の軽い数名の高齢者が自発的に行くケースが多少みられたが、ほとんどの高齢者はダイルームより離れたトイレ洗面所2を選択していた。これにはトイレ介助が必要な高齢者が多く、効

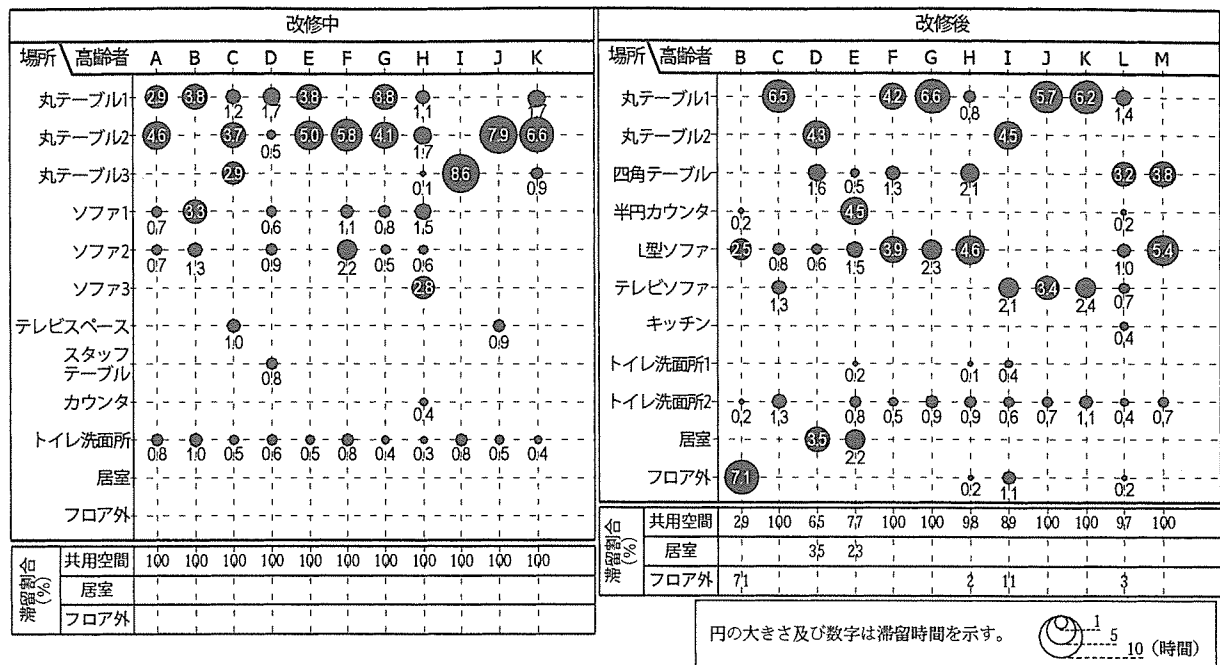


図12 高齢者ごとの選択場所と滞留時間 (N施設)

率を考慮してスタッフが数名の高齢者を同時に介助できるトイレ洗面所2に積極的に誘導していたことが理由として考えられる。

2. 高齢者ごとの行動変化

S施設と同様に会話行動、自発的移動、無為状態、徘徊行動の変化を分析した。

(1) 会話行動の変化

図13に改修中・後における高齢者ごとの会話行動時間の変化を示す。増加が5名、減少が4名、変化なしが1名であったが、4名の高齢者C・F・H・Kに大幅な増加がみられたこ

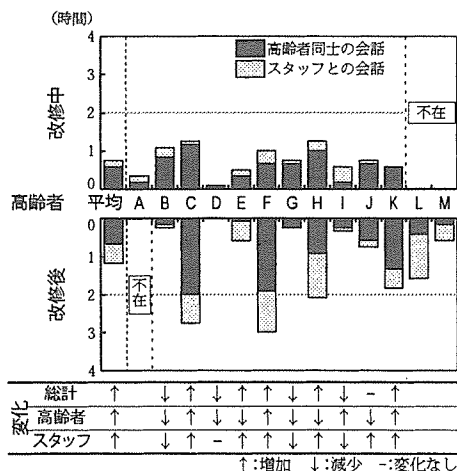


図13 会話行動時間の変化 (N施設)

とから、高齢者平均は増加した。

高齢者C・F・Kは高齢者同士の会話行動の大幅な増加が特徴で、この3名は改修後、丸テーブル1で長時間一緒に滞留するようになり、グループでの会話が多くなったためである。形状が異なるテーブル配置は、グループの特定の居場所をつくりやすかったと思われる。さらに他の要因として、施設全体から眺めた場合、丸テーブル1は自由に入出りできる格子戸のデイルーム入口に近く、他のフロアの高齢者が来訪したときにも会話が発生しやすかったことが挙げられる。

その他に特徴的な変化がみられた高齢者として、会話行動時間は増加したが、高齢者同士の割合が減少し、逆にスタッフとの割合が増加した高齢者Eが挙げられる。これはスタッフルームに近い半円形カウンタで、ひとりで長時間滞留しており、スタッフに話し掛けられるが多かったためである。

(2) 無為状態の変化

図14に改修中・後における高齢者ごとの無為状態時間の変化を示す。ほとんどの高齢者が改修後に半分に減少しており、高齢者

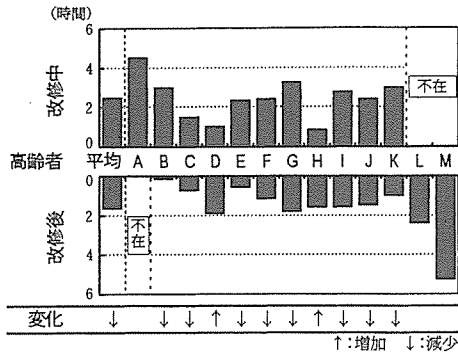


図 14 無為状態時間の変化 (N 施設)

平均も減少した。

大幅な減少がみられた8名(高齢者 B・C・E・F・G・I・J・K)のうち、高齢者 C・F・Gは丸テーブル1で、高齢者 I・J・Kは小スペースにあるテレビソファで一緒に過ごしていることが多かった。S施設でもみられたような、グループ形成に伴う他の高齢者との関わりの促進によって無為状態が減少したと考えられる。さらに高齢者Iについてはテレビソファでひとりで歌う場面もみられた。間仕切壁があることでひとつの行動に集中でき、そのことが無為状態の減少につながったと思われる。高齢者Eの無為状態が大幅に減少したのは、半円カウンタにいるときにスタッフからの声かけが多く、それに反応したためであった。

またその他の特徴として、改修後に新しく入所した高齢者の無為状態時間が他の高齢者

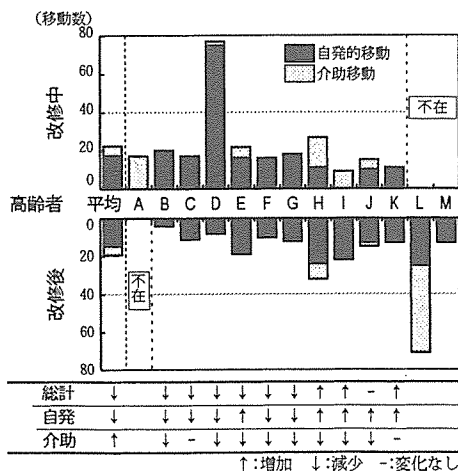


図 15 自発的移動数の変化 (N 施設)

に比べ多かったことが挙げられ、施設環境への馴染みの少なさが影響したと推測される。

(3) 自発的移動の変化

図 15 に改修中・後における高齢者ごとの総移動数、自発的移動数、介助移動数の変化を示す。自発的移動数の変化をみると、大きく増加した高齢者が2名(高齢者 H・I)であるのに対し、大幅に減少した高齢者は5名(高齢者 B・C・D・F・G)おり、高齢者平均でも減少した。

特に高齢者Dは自発的移動数の大幅な減少がみられ、これは改修中には自力歩行できたのに、改修後に転倒によるけがのために車いすの生活になったためである。また、高齢者 C・F・Gはグループで、丸テーブル1に落ち着いた雰囲気の中で長時間滞留しており、このことが自発的移動の減った要因として考えられる。

一方、自発的移動が増加した高齢者HやIの共通する特徴として、デイルームに近いトイレ洗面所1にひとりで行ってたことや、デイルーム入口から廊下および他フロアへの移動が多かったことが挙げられる。高齢者の介護度が低かったこともあるが、デイルームから多くの場所へ比較的容易に行くことができたことも自発的移動が増加した要因として考えられる。

(4) 徘徊行動の変化

図 16 に改修中・後における高齢者ごとの徘徊

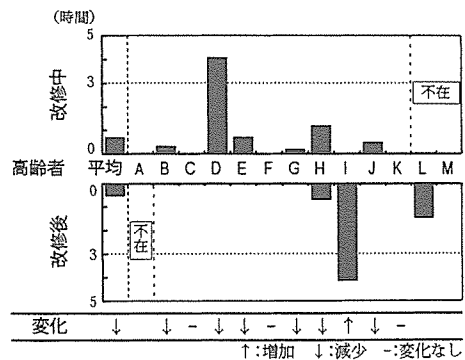


図 16 徘徊行動時間の変化 (N 施設)

徘徊行動時間の変化を示す。大幅に増加した高齢者が1名いたものの、その他の高齢者は共通して減少しており、全体の平均についても減少の傾向があった。

改修後、転倒によってけがをした高齢者Dは大幅に減少し、徘徊行動は全くみられなくなった。また減少した高齢者E・G・Jに関しては、移動し始めるとスタッフがすぐに止めに来て、もとの場所に戻すケースが頻繁にみられた。これは改修後、高齢者がテレビソファやL型ソファにいる場合、間仕切壁によって見守りが難しくなり、スタッフに事故を未然に防止する意識が働いたためと思われる。

一方、大幅に増加した高齢者Iは、ダイルームを出て同じ階にある食堂に行ったり、自動販売機で飲み物を買ったりしながら、フロア外の様々な場所に立ち寄ることで徘徊行動が増加していた。ダイルーム内外へ自由に出入りできることから、フロア外への移動を容易にし徘徊行動へつながったと推測される。

E. 環境改修項目と高齢者の行動変化

2施設における高齢者の行動変化からみた環境改修項目の有効性を表7に示す。

しつらえ中心の環境改修を行なったS施設では6畳の畳スペースが特に多くの行動に影響

表7 高齢者の行動変化からみた環境改修項目の有効性

		S施設	N施設	
環境改修項目	小スペース化		N▽ 【無為/減少】グループが形成され、他の高齢者との関わりが促進(I・J・K) 【無為/減少】ひとつの行動に集中(I)	
	個室化(準個室化)		— 【不明】共用空間を中心にして調査を行ったため居室での行動の記録の欠如	
	スタッフルーム開放	C△ —	【会話/増加】スタッフが高齢者とダイルームにおいて同じ場所にいることが多い(スタッフ) 【効果なし】高齢者の行動をみると、まだスタッフの場所として認識しており、ほとんど選択されなかった	
	ダイルーム入口		C△ S△ W△ 【会話/増加】他フロアからの来訪者 【自発/増加】、【徘徊/増加】フロア外が見え、フロア外へ移動(I)	
	窓		— 【不明】光のあたる場所を選択する効果は今回の調査からは明確には捉えられなかった	
	キッチン	—	【効果なし】米を洗う等の行動がみられたが短時間であり、今回は行動変化が確認できなかった	
	カウンタ		C△ N▽ 【会話/増加】スタッフとの定期的な会話(E) 【無為/減少】スタッフの声かけに対する反応(E)	
	トイレ		S△ 【自発/増加】身体的な障害度の軽い高齢者がひとりでトイレへ移動(H)	
	照明		— 【不明】生活リズムのような(生理的)視点から調査を行っていない	
	テーブル	N▽	【無為/減少】食事前にご飯をよそう作業(H)	
	ソファ	S△	【自発/増加】他の高齢者のいる畳ソファへ違って移動(E)	
	畳	C△ N▽ S△ W▽	6畳の畳スペース： 【会話/増加】よく会話するグループの形成(E・I・J・K) 【無為/減少】グループが形成され、他の高齢者との関わりが促進(E・J・K) 【自発/増加】畳を違って移動(E) 【徘徊/減少】靴を脱いで畳に長時間滞留(I)	C△ N▽ S△ W▽ 【会話/増加】よく会話するグループの形成(C・F・K) 【無為/減少】グループが形成され、他の高齢者との関わりが促進(C・F・G) 【自発/減少】グループ形成に伴う拠点の確立(C・F・G)
		—	3畳の畳スペース： 【効果なし】旧スタッフルームに配置	
	間仕切り家具	C△ N▽	【会話/増加】よく会話するグループの形成(E・I・J・K) 【無為/減少】グループが形成され、他の高齢者との関わりが促進(E・J・K)	
	飾りつけ		— 【効果なし】絵画や時計をみる高齢者はほとんどいなかった	

■：改修項目なし

「C」は会話行動、「N」は無為状態、「S」は自発的移動、「W」は徘徊行動、「—」は効果なしまたは不明を示し、「△」は増加、「▽」は減少を示す。また()内は変化のみられた高齢者及びスタッフを示す。

響を与え、長時間一緒にいるグループの形成による会話行動の増加や、無為状態の減少に有効であった。さらに、這って移動することによる自発的移動の増加や、床座および靴を脱ぐことで1回あたりの滞留時間が長くなり、その結果として徘徊行動の減少がみられた。これらの効果には、単に畳だけでなく、畳スペースを囲む収納家具や靴を脱ぐためのスツールなどの様々な工夫も大きく関わっており、他の場所との関係性も重要であると考えられる。また畳が置かれる位置も重要で、今回のようにダイルームに置くことにより、畳スペースにいながらも周囲との関係を保て、高齢者が長時間過ごせる安定した場所になったと考えられる。さらに6畳のまとまったスペースであることで、3～4名で居合わせながら、食事や会話、テレビをみるなど様々な行動を内包できたことも影響していると思われる。また大規模な改修項目としてスタッフルーム開放はダイルームでのスタッフと高齢者の会話行動の増加にはある程度の効果がみられたが、改修目的であった高齢者が自らキッチンや3畳の畳スペースを選択することはほとんどなく、高齢者の自発的な行動に対する効果は今回確認できなかった。その理由として、これらの場所ではスタッフは特定の高齢者2名に米とぎなどの簡単な調理を促すのみで、それ以外の高齢者に対するサポートが少なかったことや、旧スタッフルームであることの心理的影響が考えられる。

一方、空間構成や設備機器の比較的大規模の項目を中心に環境改修を行ったN施設では小スペースにおけるソファの効果的な配置が、グループ形成に伴う他の高齢者との関わりの促進や、静かな場所でひとつの行動に集中することに影響を与え、これにより無為状態の減少に有効であった。また形状の異なったテーブルにより改修目的であったグループの特定の居場所がつけられ、会話行動の増加に効果があった。さらに、自由に出入りできるダイルーム入口の格子ドアはフロア外の高

齢者との会話行動の増加への効果がみられた。しかし、ダイルーム入口はフロア外への自由な移動にもつながり徘徊行動の増加もみられた。その他、スタッフルームの近くの半円形カウンタは、スタッフと高齢者の一緒にいる機会が増えたことによるスタッフと高齢者の会話行動の増加および無為状態の減少に有効であったと考えられる。

F. S施設におけるスタッフの行動分析

1. 空間別滞留割合の変化

図15にスタッフの共用空間・スタッフルーム・居室・フロア外についての空間別滞留割合の変化を示す。改修後に共用空間での滞留割合が大きく増加した。これはスタッフルームが共用空間として開放されたためである。居室やフロア外での割合にほとんど変化がみられないことから、スタッフルームの開放が共用空間で過ごす割合の増加に直接的に反映したと考えられる。なお共用空間でないため今回の調査ではスタッフルーム内での行動内容が不明だが高齢者の滞留はほとんどないことから、ほぼスタッフのみの行動であったと思われる。

2. 選択場所と滞留時間

図16に改修前・後のスタッフの共用空間における場所ごとの滞留時間を高齢者の平均滞留割合とあわせて示す。改修前ではテーブル1・2の滞留時間が長かった。これらの場所はスタッフルームから近いことや、高齢者の滞留割合が高いことが影響していると思われる。

改修後ではテーブル2とトイレで長時間滞

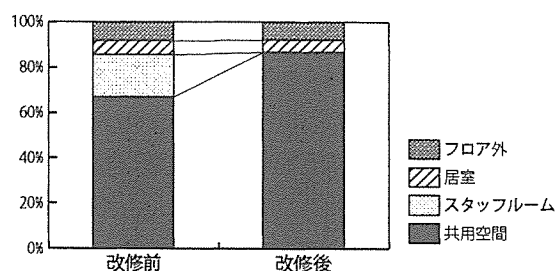


図15 空間別滞留割合 (S施設)

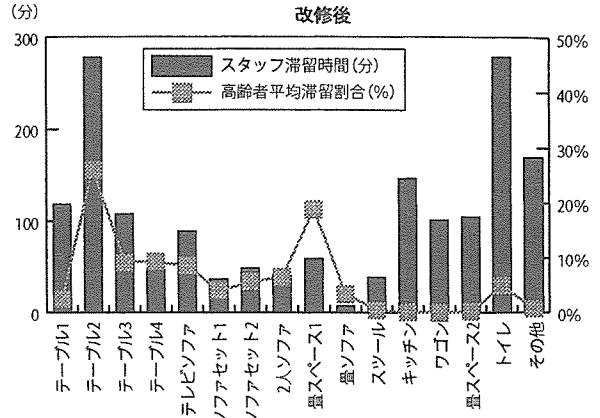
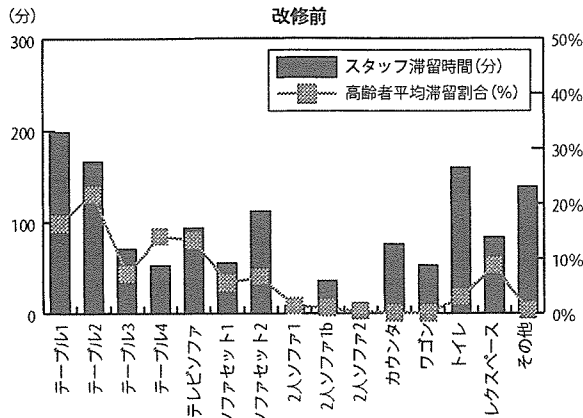


図 16 場所ごとのスタッフの滞在時間 (S 施設)

留していた。テーブル2は高齢者の滞在割合もかなり高いことから、スタッフと高齢者の共有の居場所でもあったと考えられる。スタッフの荷物や書類、調理機器などが置かれたキッチンや畳スペース2との距離が近く、またダイニング全体が同時にみわたせる位置にあることがスタッフの滞在を促進した要因として考えられる。トイレは高齢者の滞在時間が倍近くになったため増加した。また滞在時間からみた特徴的な場所として畳スペース1がある。畳スペース1では高齢者の滞在割合の大きさに比べ、スタッフの滞在時間がかなり短い。靴を脱がなければならないことに加え、ここでは高齢者4名が長時間にわたり安定的なグループを形成し過ごしていたことから、スタッフの長時間にわたる滞在がそれほど必要なかったためと考えられる。キッチンは高齢者と共有するために新たにできた場所であったが、高齢者の滞在はほとんどなく、スタッフが食事やおやつの準備に選択する場所となっていた。

3. 関わり行動の変化

本研究では対象となる高齢者が存在する行動を関わり行動とした。図17にスタッフの全行動時間と関わり行動時間の変化を示す。改修前後とも、全行動時間の6割以上を関わり行動が占めており、主要な行動であることに加え、スタッフのケアのあり方を捉える上でも

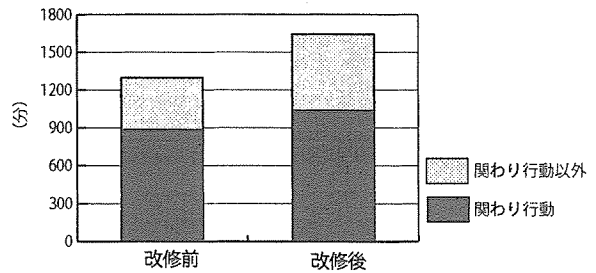


図 17 関わり行動時間 (S 施設)

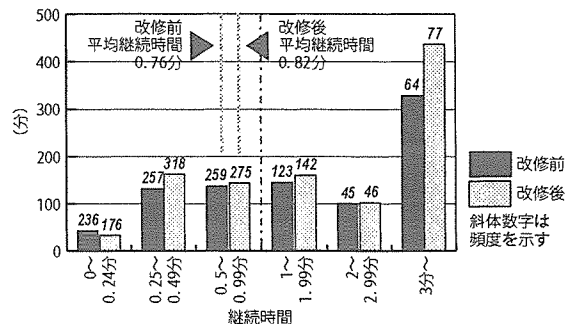


図 18 継続時間からみた関わり行動時間と頻度 (S 施設)

重要であると考えられる。改修後には関わり行動時間も増加したが、それ以外の行動時間の方がより増加量は大きかった。改修後は共用空間でもキッチンでの食事の準備や畳スペース2での帳簿への記入などの高齢者と関わらない行動が多くみられたためである。

次に関わり行動時間と頻度の変化を継続時間別に図18に示す。頻度をみると改修前・後とも継続時間1分未満のあいさつや配膳などの高齢者と一瞬しか関わらない行動が多いことが分かる。一方関わり行動時間から見ると、頻度は少ないものの継続時間3分以上のもの

が長時間占めており、特に改修後で増加した。継続時間の長い関わり行動は短時間で終わるものに比べ、個々の高齢者に対して密な対応が可能となる点で重要であると思われる。継続時間の平均値は改修前が0.77分、改修後は0.82分であった。

4. 個別対応行動量の変化

本研究では個別的に高齢者に対応する行動を個別対応行動として着目した。具体的には関わり行動のうち継続時間の平均値に近い1分を基準とし、1分以上継続し、対象となる高齢者が特定できるものを個別対応行動とした。そして、個別対応行動が行なわれた時間を個別対応行動量として分析を進めた。

図19に個別対応行動量の変化を行動分類別に示す。全体の量は増加した。その要因としては、スタッフルームの開放によるスタッフと高齢者の共用空間で過ごす時間の増加が考えられる。次に行動分類をみると改修前は会話、排泄介助、食事介助の順で大きい割合を占めた。改修後は会話、見守り、排泄介助が増加、食事介助が減少し、会話、排泄介助、見守り、食事介助の順で大きな割合を占めていた。この結果より、本研究では個別対応行動の中でも会話、見守り、食事介助、排泄介助の4つの行動に着目することが重要であると考えた。そして、それぞれの行動を、①いつ(時間帯)、②だれに対して(対象高齢者)、③どこで(場所)、行なわれたのかを分析した。なお、本研究では見守りを高齢者の横や近く

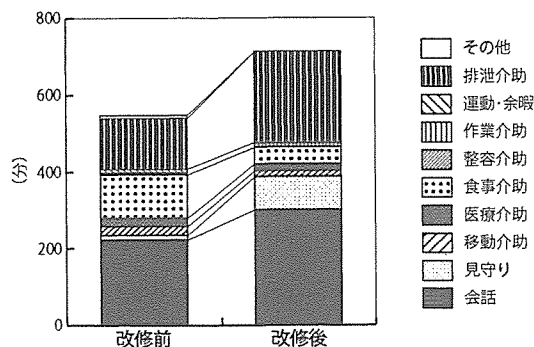


図19 個別対応行動量 (S施設)

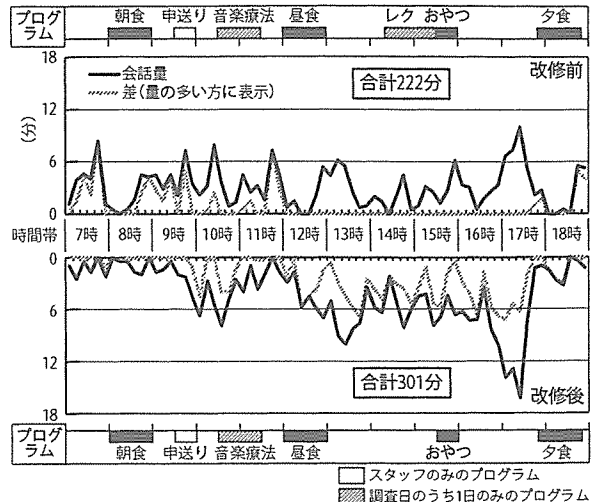


図20-1 時間帯からみた会話量 (S施設)

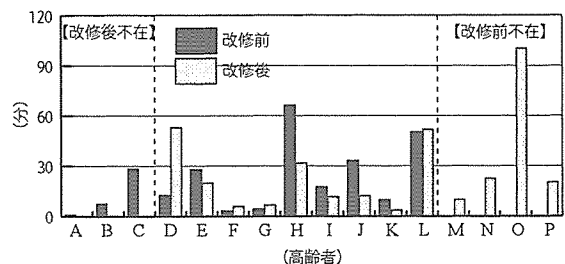


図20-2 対象高齢者別の会話量 (S施設)

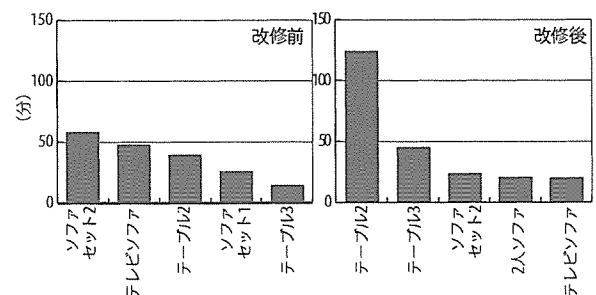


図20-3 場所と会話量 (S施設)

において、高齢者の行動を感知し、すぐに対応できる状態にあることとした。

(1) 会話量の変化

① 1日の流れからみた会話量の変化

図20-1に改修前・後の1日の会話量と差を10分ごとに示す。合計会話量は改修前が222分、改修後が301分であった。1日を通してみると、改修前に比べ、改修後は7時から9時は会話量が減少したものの、13時以降の午後は大幅に増加した。改修前の午後には事務やスタッフの食事などをするためにスタッフルームで多くの時間が割かれたが、改修後は

共用空間で高齢者と一緒に過ごしていたことが要因と考えられる。

②対象高齢者からみた会話量の変化

図 20-2 に会話量の変化を対象高齢者別に示す。改修前には高齢者 H・L への会話量が多かった。スタッフが近くに来ると呼び止めることが多かったためと思われる。改修後には新しく入所した高齢者 O への会話量が多かった。また改修後に高齢者 D への会話量が共用空間での滞留時間が長くなったため大きく増加した。減少した高齢者は高齢者 E・H・I・J・K があり、高齢者 H については、スタッフは近くにいて関わっているが、後で述べる見守り量が増加したためと考えられる。その他の高齢者は、いずれも畳スペース 1 で高齢者のみの安定的なグループを形成していたため、スタッフの会話量が減少したと考えられる。

③場所からみた会話量の変化

図 20-3 に改修前・後の場所ごとの会話量を示す。改修前は共用空間の隅にあって他の場所のことをあまり気にせずに済むソファセット 2 やテレビソファでの会話量が多かった。改修後はテーブル 2 での会話量が最も多かった。改修後はスタッフルームが開放された結果、共有空間全体が見渡せるテーブル 2 がスタッフと多くの高齢者が共有する居場所となり会話量の増加を促したと考えられる。

(2) 見守り量の変化

① 1 日の流れからみた見守り量の変化

図 21-1 に改修前・後の 1 日の見守り量と差を 10 分ごとに示す。合計会話量は改修前が 11 分、改修後が 86 分であり大幅に増加した。会話量と同様、共用空間で高齢者と一緒に過ごすようになった午後 14 時以降の自由時間において大幅に増加しており、スタッフルーム開放が大きく影響したと思われる。

②対象高齢者からみた見守り量の変化

図 21-2 に見守り量の変化を対象高齢者別に示す。改修前に比べ、改修後において見守り量の多い高齢者がみられた。特に新しく入所

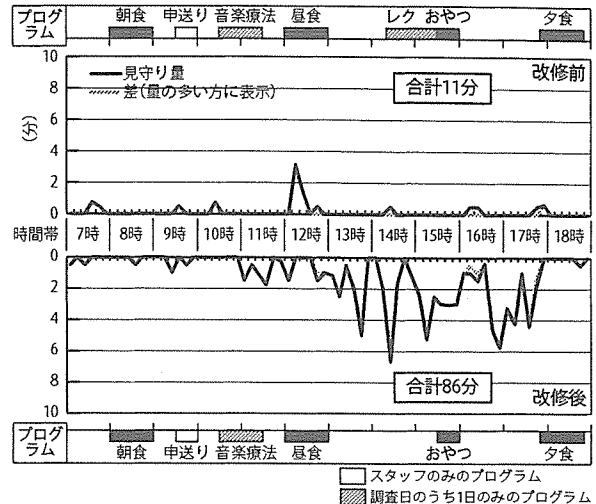


図 21-1 時間帯からみた見守り量 (S 施設)

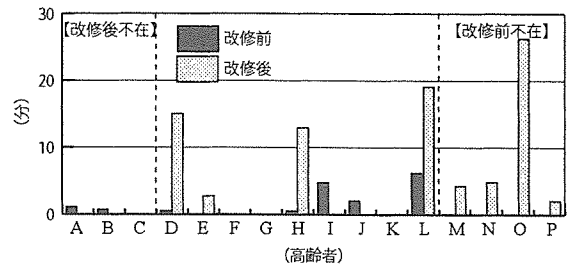


図 21-2 対象高齢者別に見守り量 (S 施設)

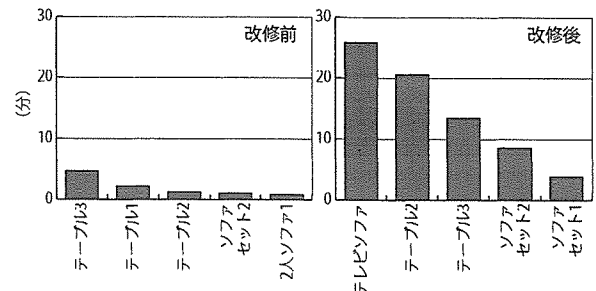


図 21-3 場所と見守り量 (S 施設)

した高齢者 O への見守り量が多かった。また高齢者 D・H・L への見守り量が大幅に増加した。高齢者 D・H は近くのスタッフを呼び止めることが多かったため、高齢者 L は改修後に認知症が重度化し、スタッフが横に座ることが多かったためと考えられる。

③場所からみた見守り量の変化

図 21-3 に改修前後の場所ごとの見守り量を示す。改修前は最も多くみられたテーブル 3 でも 5 分未満であった。改修後はテレビソファで最も多く、見守り量は 25 分を超えた。ひとり的高齢者がテレビを見るのに付き添っていたためである。また高齢者と共有の居場所で

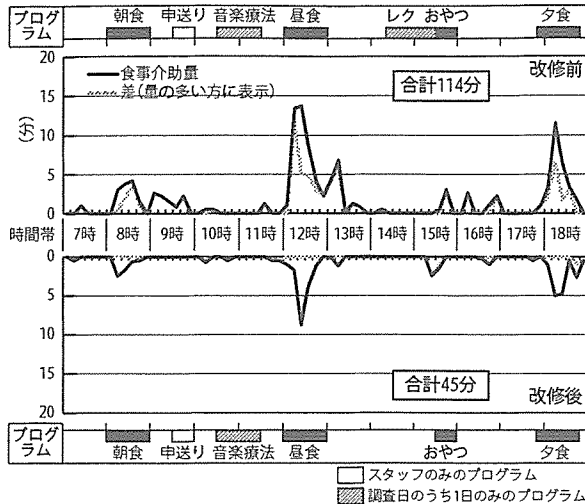


図 22-1 時間帯からみた食事介助量 (S 施設)

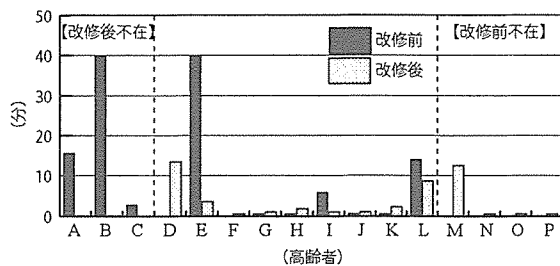


図 22-2 対象高齢者別の食事介助量 (S 施設)

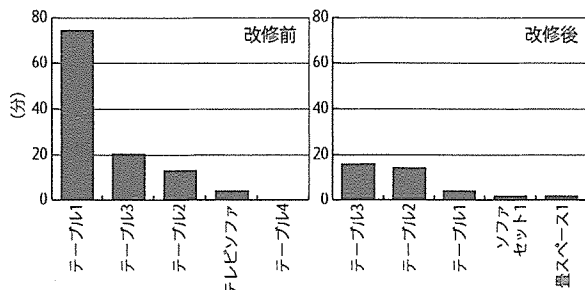


図 22-3 場所と食事介助量 (S 施設)

あったテーブル2でも見守り量が多かった。ここでは特にスタッフが帳簿に記入しながら横に座っている高齢者を見守るケースが多く、スタッフの仕事場と高齢者との関わりの場という2つの意味がみられた。

(3) 食事介助量の変化

① 1日の流れからみた食事介助量の変化

図 22-1 に改修前・後の1日の食事介助量と差を10分ごとに示す。合計食事介助量は改修前の114分に比べ、改修後は朝食、昼食、夕食とも減少し、合計は45分と約半分に減少し

た。

② 対象高齢者からみた食事介助量の変化

図 22-2 に食事介助量の変化を対象高齢者別に示す。改修前は高齢者B・Eに対する食事介助量が多かった。高齢者Bは介護度が重く食事介助が必要であったが、改修後は別フロアに移った。このことが合計食事介助量の減少した要因のひとつと考えられる。また高齢者Eに対する食事介助量が大幅に減少した。この要因として畳スペース1で自発的に食事をするようになったことが考えられる。畳スペース1での安定的なグループ形成が自発的な食事を促進した一因であると思われる、畳スペース1が間接的にはあるが食事介助量の減少に影響したと推察される。

③ 場所からみた食事介助量の変化

図 22-3 に改修前後の場所ごとの食事介助量を示す。改修前はテーブル1で最も食事介助量が多かった。ここでは食事のたびに食事介助の必要な高齢者数名が集められていた

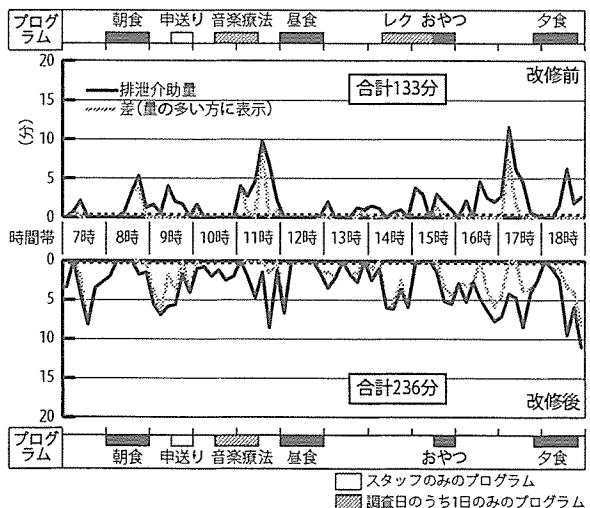


図 23-1 時間帯からみた排泄介助量 (S 施設)

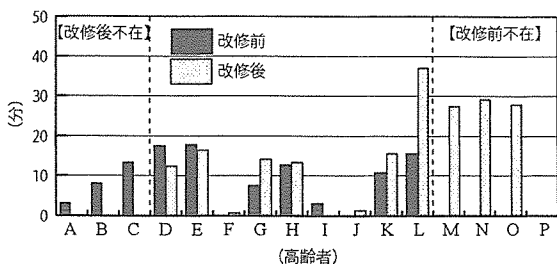


図 23-2 対象高齢者別の排泄介助量 (S 施設)

めである。改修後では食事介助が必要な高齢者が減ったこともあり、改修前に比べ減少し、極端に多い場所はみられなかった。

(4) 排泄介助量の変化

① 1日の流れからみた排泄介助量の変化

図 23-1 に改修前・後の 1 日の食事介助量と差を 10 分ごとに示す。合計排泄介助量は改修前が 133 分、改修後は 236 分と大きく増加した。しかし、1 日の流れの中で改修前・後を比較すると、食事の前後に多くなる傾向やほとんどの時間帯で排泄介助が行なわれている状況が共通しており、明確な違いはみられなかった。

② 対象高齢者からみた排泄介助量の変化

図 23-2 に排泄介助量の変化を対象高齢者別に示す。改修前に比べ、改修後では新しく入居した高齢者に対する排泄介助量が多かった。このことが合計排泄介助量の増加につながったと思われる。また高齢者も大きく増加しており、これは認知症が重度になったことと関係していると考えられる。

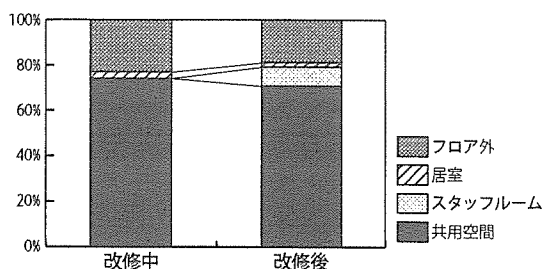
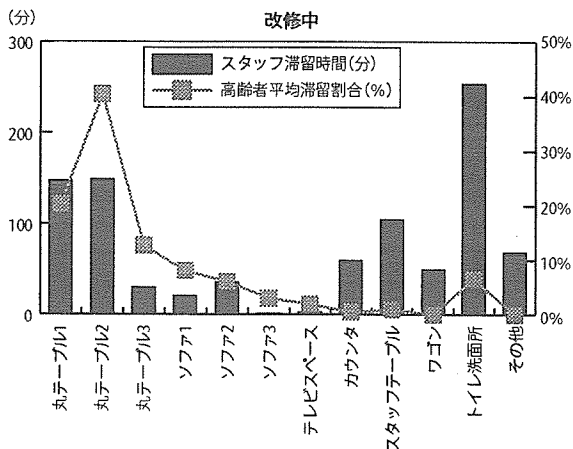


図 24 空間別滞留割合 (N 施設)



G. N 施設におけるスタッフの行動分析

1. 空間別滞留割合の変化

図 24 にスタッフの共用空間・スタッフルーム・居室・フロア外についての空間別滞留割合の変化を示す。改修後には共用空間とフロア外が減少し、逆にスタッフルームの割合が増加した。改修中は共用空間の一角にスタッフのスペースが設けられていたが、改修後は共用空間に隣接するスタッフルームで事務作業などを行なうようになったためである。

2. 選択場所と滞留時間

図 25 に改修中・後のスタッフの共用空間における場所ごとの滞留時間を高齢者の平均滞留時間とあわせて示す。

改修中は特に丸テーブル 1・2、トイレ洗面所の滞留時間が長かった。丸テーブル 1・2 は共用空間の中心にあり、高齢者の滞留割合も高いためと考えられる。またダイルールの外周に配置されていた丸テーブル 3 やソファ 1・2・3 は高齢者の滞留割合が高い割にスタッフの滞留時間は短かった。

改修後は、多くの場所で比較的長い時間滞留していた。例えば、半円カウンタやキッチン、L型ソファなどが挙げられる。半円カウンタとキッチンはスタッフルームに近く、またここからダイルールの外周をほぼ見渡せることから長時間滞留していたと考えられる。また L 型ソ

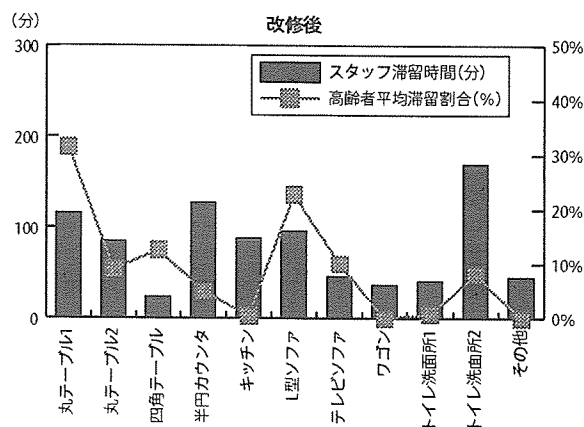


図 25 場所ごとのスタッフの滞留時間 (N 施設)

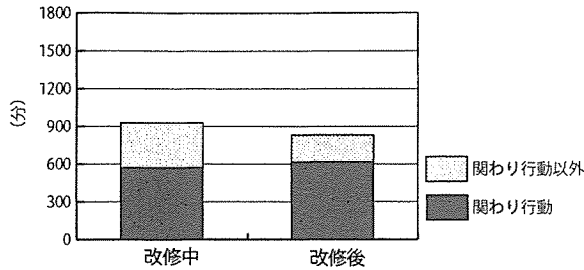


図 26 関わり行動時間 (N 施設)

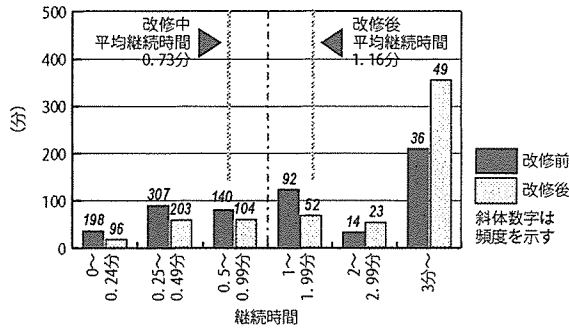


図 27 継続時間からみた関わり行動時間と頻度 (N 施設)

ファは小スペースに区切られ落ち着いたところにあり、高齢者の滞留割合も大きいことが長い滞留時間につながったと考えられる。トイレ洗面所1はトイレ洗面所2に比べかなり短い、デイルームとスタッフルームに近いこともあり、多少の滞留がみられた。

3. 関わり行動の変化

図 26 にスタッフの全行動時間と関わり行動時間の変化を示す。改修中は全行動時間の6割以上を、改修後は7割以上を関わり行動が占めた。また改修後には関わり行動時間が増加し、それ以外の行動時間は減少した。改修

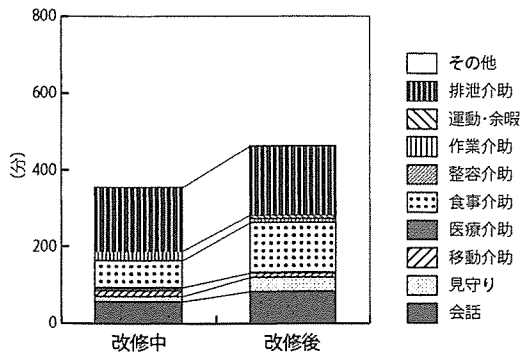


図 28 個別対応行動量 (N 施設)

中はスタッフテーブルで行なっていた帳簿記入などを改修後はスタッフルームで行なっていたためである。

次に関わり行動時間と頻度の変化を継続時間別に図 27 に示す。頻度をみると S 施設同様、改修中・後とも継続時間 1 分未満の高齢者と一瞬しか関わらない行動が多いことが分かる。一方で、関わり行動時間からみると改修後に継続時間 3 分以上のものが大幅に増加した。継続時間の平均値は改修中が 0.73 分、改修後は 1.16 分であり、改修後は S 施設に比べ長かった。

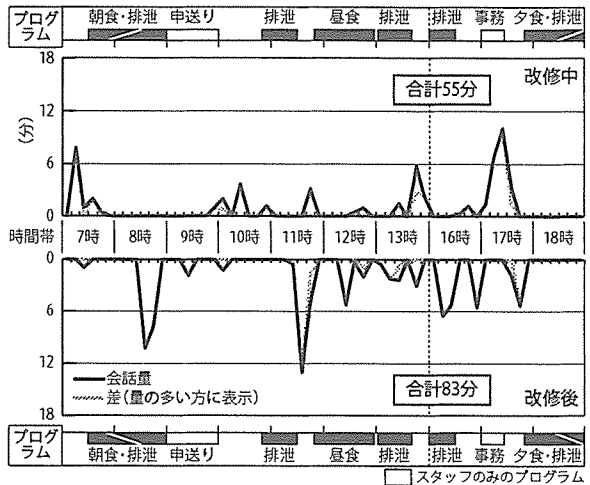


図 29-1 時間帯からみた会話量 (N 施設)

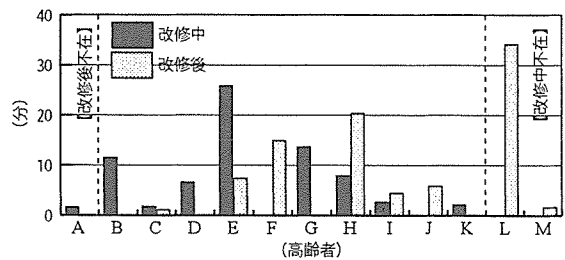


図 29-2 対象高齢者別の会話量 (N 施設)

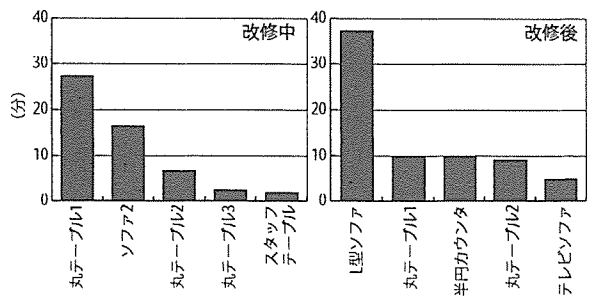


図 29-3 場所と会話量 (N 施設)

4. 個別対応行動量の変化

図 28 に個別対応行動量の変化を行動分類別に示す。全体量は増加した。行動分類をみると改修中は排泄介助、食事介助、会話の順で大きい割合を占めた。改修後は見守り、食事介助が約 2 倍に増加、また排泄介助、会話も増加しており、排泄介助、食事介助、会話、見守りの順で大きな割合を占めた。これらのことから、S 施設と同様に、会話、見守り、食事介助、排泄介助に焦点をあてて分析を進める。

(1) 会話量の変化

① 1 日の流れからみた会話量の変化

図 29-1 に改修中・後の 1 日の会話量と差を 10 分ごとに示す。改修中の合計会話量は 55 分で、改修後は 83 分であった。改修中・後ともリハビリが終わった 16 時から 18 時にかけて会話量が多くなる傾向がみられた。改修後は午前中の食事や排泄誘導との間の自由時間に特に会話量が増加した。

② 対象高齢者からみた会話量の変化

図 29-2 に会話量の変化を対象高齢者別に示す。改修前は高齢者 E の会話量が多かった。高齢者 E は介護度、障害度、認知症度が高齢者の中で最も重く、サポートが特に必要と考えられており、スタッフが隣に座ることが多かったことが要因と考えられる。改修後に会話量が多かったのは高齢者 L であった。入所して間もない高齢者 L はフロア外への徘徊がみられ、落ち着かせるためにスタッフが隣に座り会話することが多かったためと考えられる。

③ 場所からみた会話量の変化

図 29-3 に改修前後の場所ごとの会話量を示す。改修前は丸テーブル 1 で多くみられ、ここはスタッフテーブルから近く、またデイルームの中心に配置されていたことから、周囲に注意を払いつつ長時間の会話がしやすかったと考えられる。改修後は L 型ソファで多くみ

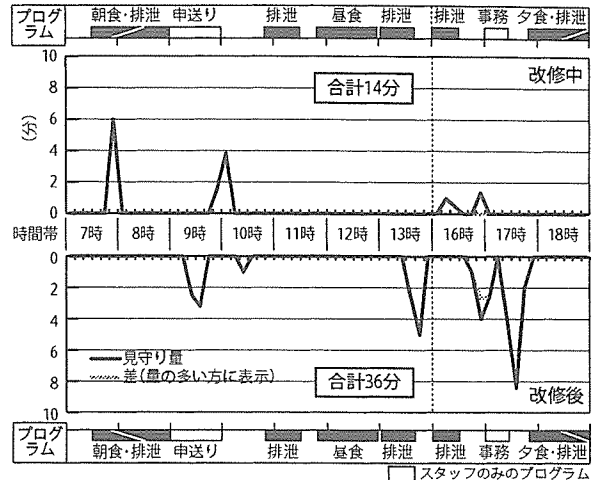


図 30-1 時間帯からみた見守り量 (N 施設)

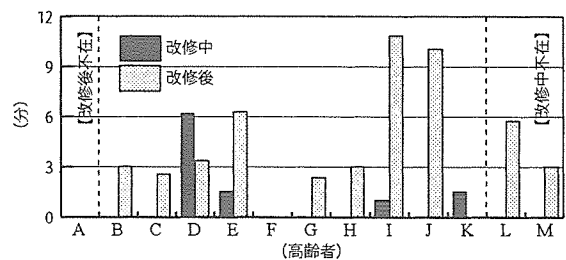


図 30-2 対象高齢者別に見守り量 (N 施設)

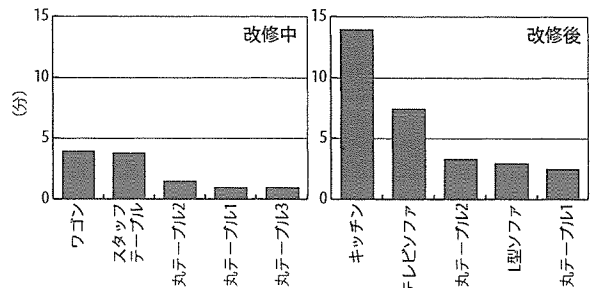


図 30-3 場所と見守り量 (N 施設)

られた。ここは主に自由時間においてスタッフと高齢者が長時間居合わせる共有の場所であった。小スペースに区切られたところにある L 型ソファがスタッフと高齢者の会話の促進に影響を与えたと考えられる。

(2) 見守り量

① 1 日の流れからみた見守り量の変化

図 30-1 に改修中・後の 1 日の見守り量と差を 10 分ごとに示す。改修中の合計見守り量は 14 分で、改修後は 36 分で 2 倍以上に増加した。特に 13 時と 17 時台の自由時間に増加していた。13 時は昼食終了後に高齢者と一緒にテレ

ビを見ながらの見守りが、17時は食事の準備をしながらの見守りがみられた。

②対象高齢者からみた見守り量の変化

図 30-2 に見守り量の変化を高齢者別に示す。改修中は高齢者 D に対する見守り量が多かった。これは高齢者 D が転倒する可能性が高かったためである。改修後は高齢者 I・J に対する見守り量が多かった。テレビをよくみる高齢者であり、スタッフが横から見守ることが多かったためである。また他の特徴として、高齢者 E に対する見守り量が増加しており、これは高齢者 E がキッチンやスタッフルームから近い半円カウンタに長時間滞留してお

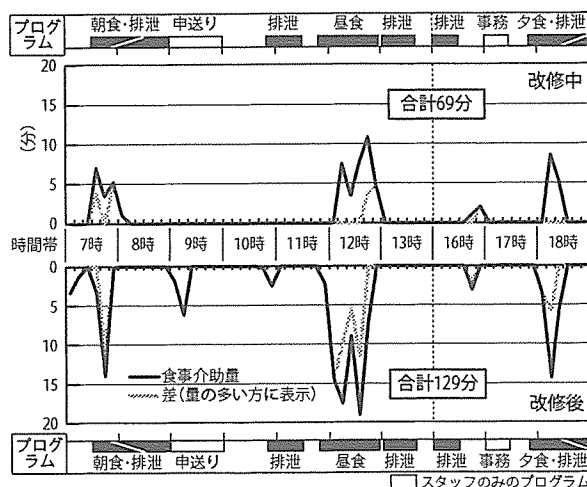


図 31-1 時間帯からみた食事介助量 (N 施設)

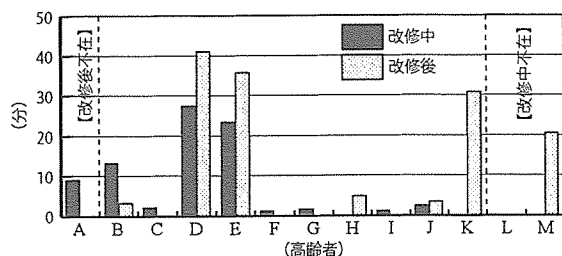


図 31-2 対象高齢者別の食事介助量 (N 施設)

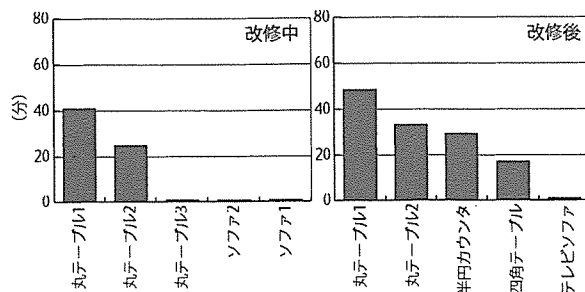


図 31-3 場所と食事介助量 (N 施設)

り、見守りを受けやすかったことが影響していると考えられる。

③場所からみた見守り量の変化

図 30-3 に改修前後の場所ごとの見守り量を示す。改修中はスタッフテーブルやワゴンから少し離れた高齢者への見守り量が多かった。改修後は、キッチンやテレビソファでの見守り量が多かった。キッチンではそこからの物理的な距離が短い半円カウンタや丸テーブル 1 にいる高齢者を見守ることが多く、食器の洗浄などをしながら見守りをしやすい場所となっていたと思われる。またテレビソファでは高齢者が集中してテレビを見ていることが多く、一緒にいるスタッフはその邪魔をしないようにとの配慮もあり、見守り量が多かったと考えられる。

(3) 食事介助量

①1日の流れからみた食事介助量の変化

図 31-1 に改修中・後の1日の差を10分ごとに示す。改修中の合計会話量は69分で、改修後は129分で大幅に増加した。改修後の特徴としては午前中の自由時間においても食事介助がみられるようになったことがある。これは起床が遅くなった高齢者にも食事とそのため場所が提供されるようになったためである。

②対象高齢者からみた食事介助量の変化

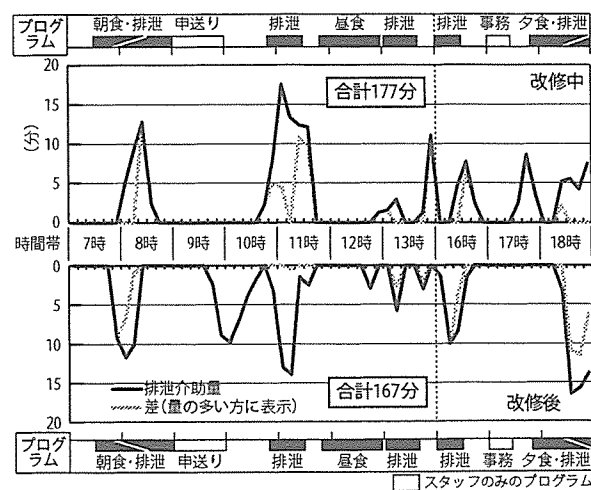


図 32-1 時間帯からみた排泄介助量 (N 施設)